

平井信義

日常の生活様式が、子どもの性格にいろいろな影響を及ぼすことは、西ドイツでの生活の中でしみじみ感じたことである。

一

或る婦人の集りがあった。リングルト夫人が音頭をとって、私から日本についての話をきこうというのである。ちょうど、日曜日の午後であったが、五人ほどの婦人が集っていた。二十代の婦人、三十代の婦人、そして五十代の婦人も混っていた。私は、四角いテーブルの真ん中に坐って、コーヒー茶碗を匙でかき廻しながら、何から話し始めたらいだらうか、と考えていた。

西ドイツで生活を始めて、最も強く私の興味を引いていたのは、親子関係であった。かねてから、我が国の親子関係と欧米の親子関係とは具体的ななちがいがあり、それが子どもの性格に現れているに違いないことを、書物を通じて感じていた。親子関係と一と言っても、我が国の親子関係の在り方を頭において欧米の親子関係を考えたら、大いにちがはずである。私は、この自分の目で、そ

れを確かめたかった。そして、友人から招かれるままに、或る時には一週間に三回もその家庭を訪問して、家庭における親子の状態を知ろうと努力した。ことに、親子のつながりが、具体的にどのような結び合っているだろうか、細かい行動の様式を見ようとした。

いま、この婦人の集りの中で話をするとすれば、親子の具体的なつながりが、我が国とドイツとはどのようなちがっているかを主題とすることが、この席に最もふさわしいものに思えた。また、私の話の反応がどのように婦人たちに現れるだろうかということも知りたかったのである。

私は、そこで「添寝」について話をした。我が国の多くの家庭では、しばしば母親が子どもに添寝をしていることから切り出した。都会で欧米の文化に親しく接している家庭では、添寝が少なくなってきたはいえるけれども、田舎にいくと、今日もなお添寝が多いことをつけ加えた。

この話の途中から、既にドイツの婦人の間には、驚きの目射しが

汲みとれた。そして、私の添寝の話がひとくさり済むや否や、三代の婦人が口を開いて、

「そんなことをしたら、気持が悪くないでしょうか？」

と聞いた。

「気持が悪い、ですって？」

と私も思わず返してしまった。

「私たちには経験がない。極く生まれだての頃、授乳する時間を除いては……」

といつて、婦人たちは顔を合わせるようにしたのである。或る婦人は、その顔に多少軽蔑の色さへ、浮かべていた。動物的な親子関係だ、——とでも言うかのように。



家庭内に子どもがひとりでおかれる機会はかなり多い。二歳のバルバラちゃんである。

その表情を見たとき、私は軽い憤りをおぼえた。祖国を離れ、外国に住んでいると、祖国にたいして殊更に愛着を感じたり、いやな国だと思ったりするのである。この時の私は、添寝にたいして、むしろ愛着を感じてしまったのである。祖国にいたときには「添寝は絶対にしてはいけません」と言っていた張本人であるのに……。

そこで私は殊更に言った。

「添寝は、親子の具体的接触を保つには、よい役割を持っています。床の中でお母さんから歌をきかせてもらったりお話をきいたり……。そうした思い出は美しく蘇ってくるものなのです」と。

しかし、ドイツの婦人は理づめであった。

「そのようなことなら、何も子どもの寝台でしなくても出来ることではありませんか」

その答問にたいして、私は黙っているより仕方がなかった。それでも、心の中では、あなた方には、添寝のニュアンスはわからないのだ——といいたい気持が起きていた。

## 二

このことに関連して、もう一つの思い出がある。それは、映画館での出来ごとであった。下宿のベッカーさんから、映画館に日本紹介のフィルムがかかっているときいたので、ドイツ人の友人を誘って見に行った。私どもが入ると、ちょうど「日本」というタイトルが映し出され、琴の音が流れ始めていた。次々と、日本の風景が紹介され、その度に、その美しさへの歎声私のまわりに次々と起きたのである。私は、内心得意であった。ところが、京都の紹介に移って、知恩院の石段が描き出されると、その段々を、背負い紐を十字にかけて赤ん坊を背負った母親が、風呂敷つつみを持って、トコトコとあがっていくではないか。それと同時に、周囲にぎわめきが起き人々の頭が動いた。そのぎわめきは、これまでの歎声とはちが

って、何か異様なざわめきだったのである。私自身には、実は、この母親の姿が感傷的な気持を誘っていた。そしてフツと目頭が熱くなるのを感じていたので、ドイツ人の間に起きたざわめきは、全く意外であった。

「どうしたのですか、このざわめきは？」と、私は友人にきいた。「日本人はまだあんなこと(背負うこと)をしているのですか？」

と友人は反問するようにいう。私はムキになってしまった。

「あのような方法は、母親と子どもとの関係を緊密にするにはよい方法なのです。母親の背中から子どもはいつでも母親に話しかけることができるのですから……」

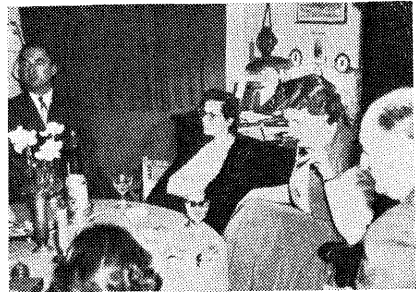
こうした説明に、友人は別に感心する様子もなく、既にスクリーンに登場した京舞子の方に気を取られているふうであった。私は、再び日本の、あの赤ん坊を背負った母親に、強い郷愁を感じて、しばらく、画面がかすんでしまったのである。

### 三

日本にいる外人から、日本の親子の関係の中で、特に寝室を別にしないことを指摘されたことがある。その外人は、日本の家族関係について研究をしに来たのであるが、母親に向かって、「お子さんと一しょにねますか？」と質問したのだそうである。彼の期待は、「イエス」であったのであるが、多くの母親の答えは「ノー」であった。しかし、その「ノー」は、彼の考えていた「ノー」の意味と異なっていたことが後にわかった。すなわち、子どもと同じ布団で寝ない

——という意味での「ノー」であったのである。外人の質問には、同じ布団で親子がねるということは全く考えていなかったもので、部屋を別にするかどうか——という意味での質問であったのである。子どもと一しょ——ということについても、我が国とアメリカとでは、このような距離の差があるのである。親子の具体的な接触のあり方が、実は、このように相異していることを私どもは知っていなければならぬ。

欧米では、生まれるとすぐに母親から離される。すなわち、病院分娩が九割以上を占めているアメリカでは(我が国では三割に満たない)、生まれた子どもは新生児室へ、産んだ母親は母親の部屋へと、別々に運ばれ、そのように離れ離れのまま、一週間で過ごすのである。授乳時以外には接触がなくなるし、初めから人工栄養の場合には接触の頻度は更に少くなる。こうした接触の少ないことから、母子関係が疎遠となることを恐れることもあって、エール大学では「母子同室制」ということを言い出した。近年に到っては、家庭分娩をすすめている学者もあるほどである。



夜の集り(パーティ)には大概夫婦でくる。妻君が風邪かなにかで出られないときは、夫も欠席することがある。

家庭に帰ってきて、ベッドというワクの中で育てられるから、既に子どもの独立した生活は認められても、その接触の頻度は我が国とは対照的である。添乳などということは、全くおこなわれる余地がない。

ボッシュ君の家庭を見せてもらった時、三か月の子どもはゆりかごの中に寝かされていた。それは床の上におかれ、泣き始めると、ゆりかごはゆさぶられた。その動揺はゆりかごの動揺に従うのである。母親が手に何かを持って仕事をしている時に赤ん坊が泣き出す時などには、ゆりかごに足をかけてゆさぶることさえもある。

ヘッケルト君の家には、一歳二か月の女の子がいた。二階の子ども部屋と決められた部屋には、四角いサークルがおかれ、その中の子どもはわんわんと泣いていた。五歳になる姉と同じ部屋なので、うっかり戸口があいていて下におりたりすると危険である。したが



子どもたちは、非常に独立心に富んでいる。カメラを向けても、ちゃんとポーズをとってくれる。

って、母親が仕事をしている間は、必らずこのサークルの中で玩具と一しょに遊んでいなければならぬのが、欧米の子どもの姿なのである。

子どもがひとりで家の中に置かれたままで

いることは少なくない。母親が買物に出るときに、乳母車にのせて共に連れていくこともあるが、買物の邪魔になるところから、しばしば家の中においていく。

友人の家に、夜、幾組かの夫婦が招かれた時に、私は

「お子さんを家においてきて、心配はありませんか？」

ときいたことがある。

「心配ですって？ 何の心配ですか？」ときき返されてしまったのであった。

「お子さんを家において来た不安です。日本の婦人ならば、こうしたパーティに出席しても、子どものことでおちおち、ゆっくりした気持ちになれないものです……」

と私は説明を加えた。

「ガール・ニヒツ（全くありませんね）」

これがその婦人の答えであった。

#### 四

子どもに、ひとり遊びをさせなければいけない——とは、私どもが我が国のお母さんに、口を酸っぱくして言うところである。

ところが既に欧米では、子どもをひとりしておくことの危険を戒めている。イギリスの小児科の病院を訪れた時に、——その病院は精神衛生に力を入れている病院であったのであるが——その外来の壁が高く、「もっと子どもをおだきなさい」と掲げてあったのを見て、思わず微笑してしまったものである。

子どもを孤独にしてはならない——こう  
した警句を使って、部屋の中にひとりおか  
れている子どもの写真がグラフに出ていた  
こともある。また、四階の破風のところに  
三十四歳の子どもが坐っているのを、消防  
士が梯子で助けに行く写真が、大きく新聞  
で報道されたこともある。お母さんが買物  
に出かけた留守に、窓から飛び出して、街  
路に面したその破風に下りてしまったので  
ある。ちょっと身を動かせば生命はない。  
それでも、家族に年寄りもおらず、女中を  
傭うことはなかなかむずかしい現在におい  
て、子どもを家の中において出かける母親  
は非常に多いのであるし、求人難の西ドイ  
ツでは、女性すなわち母親も働きに出ると  
いう率が非常に高いので、どうしても子ど  
もをひとりにしておく機会が多い。

ケルンで、幼稚園の主任の先生と話し合  
った記憶が蘇ってくる。保育を見せてもら  
ったあとで、その主任の先生が「何か感じ  
たことがありますか？」と私に向かって  
いった。そこで私は「ドイツに来て以来、

ずっと感じていたことですが子どもたちが  
非常にたくましく、独立心がさかんである  
ということですよ」と答えた。確かに、四、  
五歳ともなれば、我が国の子どもの三、四  
年生ぐらいの感じがする程、はきはきとも  
のを答え、自分のことは自分で処理をし、  
母親と別れて病院に入院して来ても、——  
欧州の病院は、完全看護といって、母親が  
付き添うところはなく、週に一回の面会時  
間しか許されていない所が多い——それで  
も泣くようなことは殆んどない。我が国の  
子どもたちが、何とまあ赤ちゃんのよう  
であろうか——私はそれと対比して、羨しい  
気持をこめてドイツの子どもを批評したの  
である。

しかし、主任の先生の答えは、私の考え  
とはいささかちがっていた。

「確かに独立心はあります。しかし、余  
りに独立心が強すぎるのではないでしょう  
か。それが心配なのです」

この答えを、今日もなお、私は耳の底か  
ら拭うことができないでいる。

## 幼児の教育 第五十九卷 第七号

七月号 © 定価五〇円

昭和三十五年六月二十五日印刷

昭和三十五年七月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします。